



## 【祝福される幸いな家庭への十戒⑧】

(神と人の物を盗まず分け与える幸いな家庭)

説教者: 鄭南哲牧師

聖書: 出エジプト20章15節・マラキ書3章8-10節/暗唱聖句: 箴言30章7-9節

(Rev. Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！特別な今年のお盆休みはいかがお過ごしでしたか。

コロナと共に猛暑の日々の中、よく休められましたか。今年は特にお盆休みになっても、家族旅行や里帰りのように遠く行けないこともあり、先週一週間は毎朝早天祈り会の時の参加者が多く、夏休み中の子どもたちも連れて来て家族と一緒に祈る姿はとても印象的で、感謝でした。後残りの後期の家族の健康と安全の為、子どもたちの後期学校生活やこれからの進路進学の為、まだ洗礼を受けてない家族の救いの為共に祈る恵みの時が持たれたことを主に感謝し、参加者にも感謝致します。

また、今週から始まるみなさんのお仕事の上に、家族のすべての日常の生活と夏休み中の子どもたちの日々の上に神の御助けと見守りがありますように切にお祈り申し上げます！

### <1. 盗むという事は？>

今日の聖書本文出エジプト20章15節に記されている神の十戒の第8の戒めは「盗んではならない」という戒めの内容です。

盗むという意味はみなさんもよくご存知のように「ひそかにあるいは不当な方法で他人のものを取ったり、奪ったりして自分のものにする」意味であります。この盗むという罪は神中心から離れ、とても自制出来ない自己中心的な欲張り、物を拝むという行為を表しています。「金や他の物、他人をもっと自分の所有にしたいから、自分のものとなるように欲しいから！」あるいは「金や物をたくさん手に入れれば、それが人生の全てや！」というような心と行いが結局、他人の状況は関係なく、自己満足、自分の欲求満たすために、他人から奪い取ろうとする行為に移ってしまいます。

今日の御言葉で盗むと言うヘブル語の単語は「ガナブ(ganab)」で意味は「後回しにする、よけて置く」という意味です。

つまり、「正しい方法は後回しにするか、横に置いて置いて、あらゆる正しくない方法で自分の利益を求めろいっさいの行為」がみなこの十戒の8番目に言っている盗むことに当たると言うことです。

ですから、単純に他人のものを奪い取ることだけが盗みではなく、頑張っても働かずに不当な方法で所得を得ようとするすべての行為、他人をごまかして取り引きをしたり、許可を得ずに勝手に持って行く行為、払うべき分を払わなかったり、借りたものを返さない行為、過度な利息を取って利益を得ようとする行為など、一切の正しくない自分の利益の為の行為を言います。なので例えば、頑張っても働いて得ようせず、度を過ぎた投機(とうき)行為、賭博やかけごと、運を願う心理(宝くじなど)もある意味で盗人の心だと言えます。このような行為で決して人はまことの幸福を味わえることも、味わった人もいません。

実際、アメリカで高額な宝くじ当選者たちの当選後の人生を追跡して研究した人がいました。結局のところ、もしも高額な宝くじが当たったとして、最終的にそれによって幸せになった人は一人もいなかったということです。

一時期アメリカではこのような面白いユーモアがはやった事があります。ある奥さんが3百万ドル(約3億2千万円ぐらい)の宝くじが当たったという知らせを聞いて悩み始めました。なぜなら、彼女の主人は心臓病を患っていたので、これを主人に知らせるときつとショックで、心臓麻痺を起こしてしまい命に支障が出てしまうのではないかと心配し、それで担当の医者にご相談したそうです。その担当医はご主人にショックにならないように知恵をもって、知らせると言いました。ついに医者が主人ととても慎重に話を始めながら、話を進めます。「もしあなたが百万ドルの宝くじに当たったらどうしますか。」と聞いたら、彼女のご主人はにっこりと笑いながら、「まさかよ、ぼくにそんな運がやってくるはずがあるのでしょうか。」と答えたそうです。医者は「でも、万が一でも、そのような運があなたにたまたまやって来たらですよ。」と聞かれると主人は「そりゃ、世界一周でもして、それでも残ったら、苦労した僕の妻のためにステキな車でも買ってあげたいですね」と答えます。医者はよっしゃー！と思い、このタイミングだと確信し、さらに「もしも、百万ドルでも、2百万ドルでもなく、何と3百万ドルの宝くじに当たったらどうしますか。」するとご主人はためらうことなく、「もしもすら、そんなことは自分に決して起こらないけど、もしもそうになったら、まあ、今まで大変お世話に先生にもその半分をさしあげますよ。」この話を聞いた担当医者こそ、その話にショックを受けて、心臓麻痺を起こしてしまい倒れて死んでしまったというユーモアな話です。結局、そのような方法でいくら高額なお金を手に入れたとしても、決して、人は幸せになれないという話なんですね。

もちろん、金や物、財物は一つの神の祝福として伴い、ついて来るものとして聖書もよく教えて下さっています。しかし、財物に対

して偏って頼りすぎている考え、心から節制することが出来ず、盗もうとし、どうしても奪い取ろうとする行動につながってしまうので警戒しなければならないことを教えて下さっています。

みなさんは今まで実際他人のものを盗もうとした事は一切なかったかも知れません。しかし、きりが無い財物や物への関心は持ってないでしょうか。今よりもっとたくさんのお金をもうければ、欲しいものを全部手に入れる事が出来るなら、金だけが十分あれば、将来の全てを保証してくれるし、欲しいものを全部手に入ると、絶対幸せになれる！絶対成功した人生になれる！家族も、知り合いも裏切る時があっても金は絶対裏切られないんだ！この地上で金より価値ある物はない！’>のように思っている方々はいませんか。

イエス様はマタイの福音書6章24節に「だれでも、ふたりの主人に仕えることはできません。。あなたがたは、神と富とに仕えることはできません。」とおっしゃいました。どんな意味でしょうか。人は神だけではなく、富にも縛られ、奴隷のように富に仕えやすい者であることを教えて下さっています。財物はある意味で神が下さった祝福として分ち合える事も出来ますが、一方では人は財物をまるで神のように拝もうとする可能性もある事、金や物質が自身の人生全てを左右させる奴隷にならないように注意しなければならないということでもあります。キリシヤ語の聖書では財物を‘マンモン’だと書いてありますが、そのマンモンが切りがない人のものへの貪欲と欲張りに合わせられ、人の心と思いを支配し、人に拝まれる偶像の神を表す言葉として使われるようになりました！ 実際今我々が生きている時代はまるでマンモンが神ようになって、人の価値、人生さえ全てを左右しているかのような時代ではないでしょうか。ですから、ここで我々がマンモンの下で金、物質の力に捕らわれないようにするためには、全ての関係において損得関係とか取引関係、計算的な関係で思われぬようにまず気をつける必要があります。神は我々に恵み(ギリシヤ語でカリス(c haris):値無しに与える、ただ与える)の関係を結んで下さり、体験させ、教えて下さいながら、我々もそのような愛と恵みの関係を持てるように望んでおられます。

<2. 人生において盗みの誘惑を克服する為:①感謝と自足をもって、正当な労苦の代価を大事にする。>

人生において盗みの誘惑を克服するために、あせを流しながら労苦しながら、働く価値を尊重する姿勢を大事にし、保って行かなければなりません。 盗みをしていた人が盗みを中断したとは言え、この御言葉に完全に従ったとは言えません。なぜなら、いつまた盗みを犯し始めるか分からないからです。その意味で、新約聖書のエペソ人への手紙4章28節は第8の戒めの適用としての知恵を教えます。「盗みをしている者は、もう盗んではいけません。かえって、困っている人に分け与えるため、自分の手をもって正しい仕事をし、労苦(ほねおって)して働きなさい。」つまり、僥倖(ぎょうこう、偶然の幸運)を期待するのではなく、今自分に与えられている仕事に忠実に働く事が盗もうとする誘惑から自分を守ることが出来ることを我々に教えて下さっています。今日、我々の時代は不可能なことであるのを知っているが故に、一度の宝くじが当たって金持ちになったり、一発のチャンスで人生の逆転をねらっている人々も我々の周りに大勢いるのかも知れません。聖書はかりにそれで、たくさんお金をもうけたとしても、それは正しくないと教えています。もちろん、最近コロナ不況が深刻となって仕事をやりたくてもやれない状態となっている方もいらっしゃるの確かです。だからといって一発ねらいで人生を勝負しようとか、正当な努力や働きの結果のほうより、漠然(ぼくぜん)とした考えや期待のゆえに、結局人が盗み、強盗のような事件につながってしまう事件が今の時代いかに急増されているのでしょうか。

エペソ人への手紙4章28節で人が盗もうとする誘惑に陥ることがないように、「自分の手をもって正しい仕事をし、ほねおって働きなさい。」と我々に言われます。詩篇128篇1-2節では神様を恐れ信じる全ての人々が追求すべき幸福な人生の正体をこのように証します。「幸いなことよ。主を恐れ、主の道を歩むすべての人は。あなたが、その手で労した実りを食べること、それはあなたの幸いあなたの恵み。」

お金や人間の権威による救いではなく、ただ御言葉通り、御言葉中心に信仰による救いが正しいと強調していた1517年ドイツの宗教改革者だったマルティン・ルター先生は当時ローマカトリックの既得権者たちから激しい命の脅威があったのにもかかわらず、惜しまずに神様の御国と神の栄光のため、今自分に与えられているすべてのことに止まらずに実現されるまで力を尽くしました。彼はいつも自分の机の前には、「今も天の父なる神様が働いておられるので、私も今働くべきだ！」と書いて貼っておいてそうです。この深い意味は全ての始まりから実現までの一切のことがきつと神様にかけられていて、神様の御手の中で御力によりますが、神様はやっているすべての結局は私たちの手を用いて成し遂げてくださることを信じたため落ち込みそうな環境の中でも最後まで神様から今自分に与えられた責任と使命として、最後まで忠実に働いたのではありませんか。そのマルティン・ルター先生はつい

に人類歴史の中労働信念を変える不朽の名言も残しました。「“どんな労働でも労働は神聖なことだ”」ということでした。

今日出エジプト20章15節に記されている第8番目の戒めは「盗んではならない」という神様の戒めは我々が単純に他の人の物を盗まないことぐらいではなく、もっと根本的な意味として、自分の努力や苦勞なしてただ愚全の利益を願ったり、僥倖(ぎょうこう)や運を願ったり、あらゆる投機も盗むことに当たることであることを忘れてはいけません。

よく冷静に考えてみれば、間違った投機に手出して、それが成功すればするほど、むしろ自身に与えられている人の働こうとする労働の意欲がどんどん亡くなってしまいうようにさせ、ついには、人生を幸福にではなく、不幸に導いてしまうことを忘れないようにしましょう。

神様から今の自分に与えられていることや働ける事に感謝しつつ、自足する事が盗みの誘惑に打ち勝つ道であると信じます。

箴言30章7-9節でアグルという人の祈りの中で神様に自分が盗人にならないように、主にこう求めて祈りました。

「二つのことをあなたにお願いします。私が死なないうちに、それをかなえてください。むなしいことと偽りのことを私から遠ざけてください。貧しさも富も私に与えず、ただ、私に定められた分の食物で私を養ってください。私が満腹して、あなたを否み、「主とはだれだ。」と言わないように。また、私が貧しくなって、盗みをし、私の神の御名を汚すことのないように。」

私たちも今日からこのアグルの祈りを共に祈ったら、いかがでしょうか。子どもたちにこのように祈ってあげ、またこの祈りを教えたらいかがでしょうか。

テモテの手紙第一6章6節-11節には「しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。私たちは何も(何一つ)この世に持って来なかったし、また何も(何一つ)持って出ることできません。衣食があれば、それで満足すべきです。金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に沈(しず)める、愚かで、有害な多くの欲望に陥ります。金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷(まよ)い出て、非常な苦痛(くつう)で自分を刺し貫(つらぬ)きました。しかし、神の人よ。あなたは、これらのことを避け、義(正義)、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を(熱心に)追い求めなさい。」神が自分に必要な分を与えて下さったという自足する信仰、そして今働ける仕事をも神が導いて下さったと信じ感謝する信仰を持って、忠実に働くことこそ、今の、今日の人生のすべての事に感謝しつつ自足する生き方とさせ、盗もうとする様々な誘惑に打ち勝つ道になると信じます。明日から始まるみなさんの働く現場でこのような信仰と生き方をしっかり保って向かう全クリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族となりますように切にお祈り申し上げます。

## ＜2. 人生において盗みの誘惑を克服する為：②すべてのものの主人であられる神様を忘れない事＞

聖書では盗みの根源は神様との正しくない関係の状態から犯してしまうものであることを聖書は教えてくださっています。

つまり、人が何かを正しくないままでも絶え続(つ)く所有しようとする貪欲の欲望をもつことになるのは、根本的に、神様がすべてのものの主であられることをすっかり忘れてしまっているからだということです。神様が本当にすべてのことの主であり、我々の必要さを真実に満たして下さることがおできになられるとはっきりと信じているのなら、一攫千金(いっかくせんきん)なんか狙(ねら)う必要もないし、投機(とうけい)なんかに依存する必要がないでしょう。

詩篇24篇1節に、「地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のもの(である)。」、ヨブ記1章21節には「そして言った。「私は裸で母の胎(た)から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」」だと書かれているように全てのものは神からのものであります。

すべてが主から与えられると明らかに信じるなら、だれかから不正な収入の誘惑など例え、賄賂(わいろ)をもらったり、公金を横領(おうりょう)しようとしたり、投機(とうけい)などを通してもっと所有しようとする代わり、もっと祈りながら忠実に働きに集中することができるでしょう。愛する信仰の家族のみなさん！確かに人生の中で物質やお金は生活をするために確かに必要です。そのもの自体が悪では決してありませんし、もちろん正しい投資などもあることも認めます。

しかし、目を閉(閉)じて、あけても、もしすっかり欲(ほ)しがる物ばかりか、お金しか考えられない、見えないのなら、その人にはもう貪欲の奴隷(ぬれい)になりがちです。こんな貪欲(こん)がいつでも我々を盗人(たうじん)に変身(へんしん)させる可能性があることを忘れないで下さい。貪欲(こん)のように金や物への執着(しやく)から、我々が奴隷(ぬれい)にならず、自由(じゆう)になれるためどうすれば良いのでしょうか。それはもう我々がもっているすべてののこ

と、そして将来我々が所有することになるすべてのことも自分自身のものではなく、全てが神様の御手にあり、すべてのものが神のものであることをいつも信じ、認める必要があります。どうやって具体的にそのように生きる事が出来るでしょう。

それは、神様に捧げることを習慣化にすることの理由にもなるでしょう。

みなさんもよくご存知のように神様に捧げることの中で一番基本になる事が十分の一献金なのです。旧約聖書のマラキ預言者はこのマラキという預言者が預言をしていた時には、イスラエルの民が経済的な厳しさの中に置かれていた時でした。環境が非常に厳しくぼろぼろになっているそこで、神が「なぜ、あなたがたの生活がこんなに苦しいのか理由が分かるか。その理由は、あなたがたが私にささげなければならない十分の一をささげないことにあるのだ」と説明されています。神様を信じる民が神に十分の一をささげる信仰生活においてそれを忘れる瞬間、もう神様の御前で神様のことを人は盗んでしまっていることを厳しく指摘し教えてくださっています。今日の本文マラキ書3章8節を読んでみましょう。

「8人は、神のものを盗むことができるだろうか。だが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちはあなたのを盗んだのでしょうか。』十分の一と奉納物においてだ。」

つづけて10節では神様はこのように約束されます。

「十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしを試してみよ。一万軍の主は言われる。一わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうか。」

愛する兄弟、姉妹のみなさん！十分の一献金というのは、私たちの人生におけるとても大切な一つの真理を示しています。それは“私たちに与えられているすべてのものは神のものです。”ということです。そして、与えられた収入のすべてが神様からのものですが、その中、十分の一を神に差し出すことによって、それが真実であることを表明するのです。もし、わたしたちが自分の収入の十分の一を喜んで差し出すことができなければ、どうして「全てのもの主であられる真の神に自分のすべて委ね切ってすべてをささげます」ということができるでしょう。神様に何かをささげることが難しいと思われる時は、次のことを覚える必要があります。つまり、私がそれを所有しているのではなく、神様がそれをしばらく所有するようにさせて下さっているのだということです。所有物に関してどのような考え方をしたらよいのでしょうか。聖書の教えている考え方は次の通りです。すなわち、私たちが十分の一献金をするとき(例えば、1万円の収入のうち、千円を献金するとき)、それは10%をささげるといよりも、収入の90%を使わせていただくのだということです。すべてのものは神のものです。ですから、神が私に90%を任せて下さっているのだと考えるのが聖書的な理解なのです。

愛する信仰の家族のみなさん！なぜ、神様に十分の一をささげるのを神様は命じて下さったのでしょうか。神様にも物質が必要だからでしょうか。神様もお金が好きだから、あるいは、神様にも何か足りないからでしょうか。十分の一を捧げるように命じて下さったのは、神様のためより、実際我々のため、我々がさらに祝福されるためであることが聖書を通して約束して下さっています。

例え、会社から、畑から、10というものが与えられたなら、その中の9は、神が私たちに食べるために与えられたものであり、その中の1は、その9割を祝福するために、神様の前に蒔くものとなります。しかし、蒔くものなのに、食べてしまったらどうなるのか。刈り入れの時に収穫することがその手で出来ないのではありませんか。(読んで見ましょう。コリント人への手紙第Ⅱ9:6-8(聖書が教える献金の原則と約束))

献金の生活は、我々は神様を実際どのように信じているのは、私の信仰と強い関係があります。信仰が献金に現れてくると言えるのではありませんか。みなさんは、神様が実際にすべてのもの主であられることを疑わずに信じていらっしゃいますか。刈り入れの主が我々にさらに豊かに収穫を手に入れることが出来るための十分の一を信仰の種として、我々のために捧げてみなさいと命じ、勧めて下さっているのではありませんか。

「ですから、わたしはあなたがたに言います。何を食べようか何を飲もうかと、自分のいのちのことで心配したり、何を着ようかと、自分のからだのことで心配したりするのはやめなさい。いのちは食べ物以上のもの、からだは着る物以上のものではありませんか。26空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納(おさ)めることもしません。それでも、あなたがたの天の父が養ってくださいます。あなたがたはその鳥よりも、ずっと価値があるのではありませんか。(マタイ6:25-26)」

神様を本当に真の神として信じ、告白し、ただ自分の力ではなく、神の力によって、神様によって満たされた祝福の人生にさせるため神様が我々のために定めて下さったことを覚えて下さい。御言葉の約束のように例えを上げなくても今まで神様に正しく十分

の一を捧げたことによって祝福された人生の証はあきるほどよく聞きましたし、かえって神様に捧げることによって自分に損になったことは聞いたこともないのです。神にささげる十分の一の献金だけは、これから、自分勝てにし、神のものを盗むことのないように気をつけましょう。クリスチャンとして神様に心から正しく捧げる十分一の生活がちゃんと身につけられるようにしましょう。それによって必ず神様に正しく捧げることが物にたいする盗み、貪欲と執着の誘惑から自由にされる道になると信じます。

<2. 人生において盗みの誘惑を克服する為：③分け与える生活が祝福された人生であり、本来の幸いな家庭である>

神様に捧げることはクリスチャンの生活の基本なのです。しかし、同時に大切なことはクリスチャンとして分け与えることが生活化になることです。それが盗む誘惑に乗り越えられる道であります。この世の中では与えようとする人ともらえようとする人のタイプがあります。人が子供の時は受ける側の生活ですが、人は成長して行くうちに与えることや分け与えることの大切さを少しずつ学んで行き始めます。それがまさに成熟というものではありませんか。盗もうと、欲張りによって不当に自分の物にしようとすることの反対は“分け与える事”であります。それで使徒パウロは直接自分が伝道し、養育していたエペソ教会の人たちに「このように労苦して、弱者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が『受けるよりも与えるほうが幸いである。』と言われたみことばを、覚えておくべきだ。』(使徒の働き20:35)だと話しています。

我々がイエスキリストを信じた者として経験した最大の事件は「神は、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。”(ヨハネの福音書3:16)という神の恵みと愛の救いの御業ではないでしょうか。御子イエスキリストを罪人である我々のため惜しまずにお与えて下さった神様の愛を経験した者が我々です。ヨハネの福音書3章16節を経験し、信じるクリスチャンたちはこれからは、ヨハネの手紙第一3章16-17節を実践して生かなければなりません。ロナルドサイダー(Ronald Sider)という神学者はすべてのクリスチャンたちはこのヨハネの手紙第一3章16-17節の御言葉を大切にしつつそのように実践していないのなら、まだその信仰は正しいと言えないと強調しました。「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちを捨ててくださいました。それによって私たちに愛が分かったのです。ですから、私たちが兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」つづけて17節の御言葉をみてください。「世の財(富)を持ちながら、自分の兄弟が困っているのを見ても、その人に対してあわれみの心を閉(と)ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。」

<まとめ>

今日の神様の十戒の中第8番目の戒めは「盗んではならない」でした。しかし、この命令についての真の従順はただ他の人の物に盗みません！という決心だけでは足りません。我々には人のことだけでなく、神様のことで奪おうと、盗もうとする誘惑に気をつけすべての主なる神をさらに強く信じ、頼りて進みましょう。自己中心的に他のものを奪おうとする我々の手が自足し、感謝する心を持ってむしろ誠実に働き、汗の実りをもって隣人に、助けが必要な人にも、キリストの愛を持ってわずかなものでも分け与えることが始まる時こそ、我々は奪う、盗む人じゃなく、満たされ、分け与える祝福された人と家庭になると信じます。何かいつも受けるのに早かった人生が、これからはだれより熱心に分け与える者に先になって下さい。そのようなクリスチャンプレイズの信仰の家族のみなさんとなって不況の中でもあっても、神様が好況(こうきょう)を経験させ、さらに豊かに満たされる幸いな人生と家庭となりますように主イエスキリストの御名によって切にお祈り申し上げます。アーメン！

EX) 1904年、イギリスのウェルズで霊的なリバイバルが起こったころの出来事です。教会の人々が新しくされ、教会に大きくリバイバルが起こっているといううわさが町中に広がりました。宝石の店を運営していたある商人もこのようなリバイバルの話を聞いて教会に一度見に行きたいと思って行って見ました。ところが、教会のクリスチャンたちが祈り、賛美し、のべつたえられる説教をきいてもただ、さわがしい感情のまつりみたいな感じだったので、これ以上、教会には行くまいと心に決めました。リバイバルと言うことはたいしたものではないと思いました。しかし、その何日後、店に一人の若者がきてこの店の宝石を盗んだことがあると告白しながら宝石を出すのではないのでしょうか。どうやってこのような決心をするようになったのかわけを聞いたら、聖霊が臨まれ、リバイバルが自分の中でも起こり、隠しておいたいつわりと盗みの罪の悔い改めをせざるを得なくなったと告白しました。自分の店だけではありませんでした。となりの話を聞いてみたら、盗まれたものが戻ってきたとの話でいっぱいでした。神様の聖霊が臨まれたら盗まれた財布も戻ってきたし、長らく返されなかった借金も返され、不正な方法も施政され、個人から始め、社会全体の変化が起こったのです。これを知った宝石の店の商人はまた改めて教会に行き、イエスキリストを受け入れたと言う話です。きよい神様の霊が我々に臨まれると些細なことでも偽り、ごまかし、ぬすむことなどと共存することはできません。